

③区の調査概要



③区は斜面のため、遺構・遺物の数は多くはありませんが、丘陵の上では見つかっていない平安時代の遺構・遺物が確認されました（土坑1・2）。土坑2で見つかった石組みの性格は現在検討中ですが、近くの穴から刀子（小型のナイフ）が出土していることから、お墓に関連するものである可能性も考えられます。

また、調査区の西側では竪穴住居と掘立柱建物が見つかりました。これらの建物は西側の④区にまで広がっていることから、今後の調査で他にも建物が見つかるかもしれません。

調査の成果

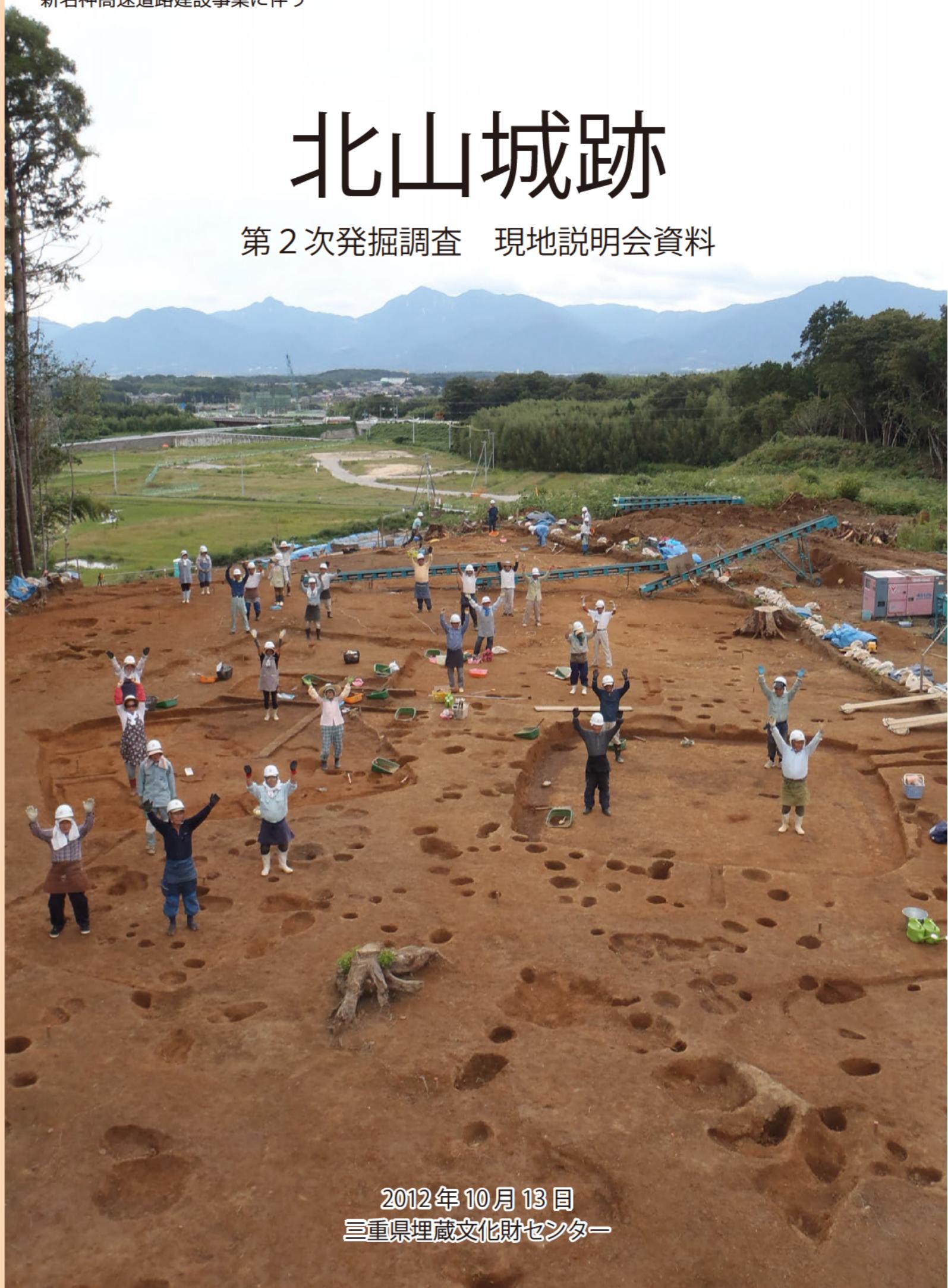
①区の成果 これまで、北山城跡が位置する四日市市北山町の丘陵上において、弥生時代後期～古墳時代前期（約1,800～1,700年前）の遺跡は確認されていませんでした。しかし、今回の発掘調査によって、この時代の集落跡が初めて確認されました。これは、非常に大きな成果といえます。

特に竪穴住居は22棟も確認され、今後の調査によってさらに増えることは明らかです。竪穴住居の中には3棟が入れ子状に重複しているものがあり、出土した土器は弥生時代後期～古墳時代前期と長期間にわたります。御在所岳や朝明川への眺望の良いこの場所を好んで、長期的に人々が生活をしていたものと思われます。

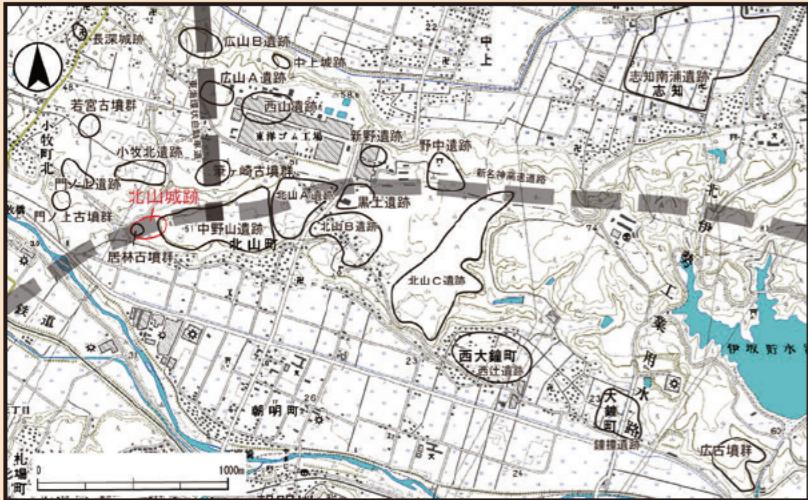
③区の成果 丘陵斜面の端部で平安時代（約1,100年前）の遺構や遺物が確認されたことにより、斜面下の平野部にも同時代の遺跡が広がっていた可能性もあります。今後は、北山城の城の構造や、さらなる発見が期待できる遺跡であることが明らかになりました。

北山城跡

第2次発掘調査 現地説明会資料

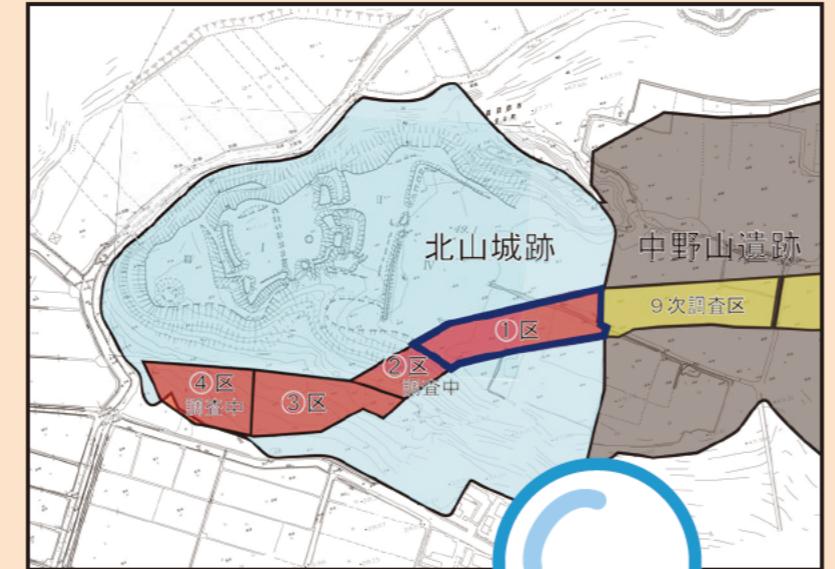


※北山城跡の縄張図は伊藤徳也氏 2008『再発見 北伊勢国の大城』から改変



北山城は、朝明川と員弁川の間に位置する丘陵上に所在する山城です。これまで発掘調査はなされておらず、文献史料にも記載がみられないため、築城の時期や城主などはわかっていません。しかし周辺には、中世に近江から桑名を結ぶ主要道として使用された八風街道があり、また北山城以外にも点在する山城(伊坂城や市場城など)がいずれも中世後期(戦国時代)のものであるため、北山城も同時期の山城と推測されます。

今回の調査では、北山城跡の遺跡範囲外である、中野山遺跡9次調査区で北山城の堀ではないかと推測される溝が確認できました。



↑ 焼失した竪穴住居(赤)と重複する竪穴住居(青)



↑ 受け口状口縁の甕
(出土位置:住居内右の○)

竪穴住居3は大小2棟の住居が重なっています。特に小さい方からは炭が多量に出土し、住居に使用された建材の一部が、何らかの理由により燃えたと考えられます。焼失後、同じ場所にやや浅く大型の竪穴を掘り、新しい竪穴住居がつくられています。



↑ 竪穴住居 1



↑ 上層より出土した土器と石

埋土上層の土器群

竪穴住居4では、破片となった土器や石が住居の床面からではなく、埋土上層から出土しています。いずれも竪穴住居が使用されなくなり、土が堆積していく途中で、廃棄されたものと考えられます。こうした埋土上層から土器の多く出土する竪穴住居が、北山城跡ではいくつか確認できました。

排水溝とその機能

竪穴住居4の隅には、住居の外へ続く溝、排水溝が設けられています。この排水溝はその名の通り、住居の内部から外部へ雨水や生活排水などを排出するための施設と考えられます。



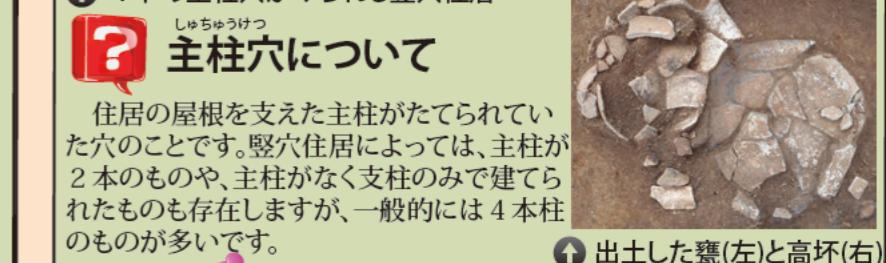
↑ 壁周溝・貯蔵穴がみられる竪穴住居

砥石からわかること

竪穴住居2で出土した砥石は非常に小型で各面はツルツルしています。そのため石器の加工などで使用されたものではなく、金属を研ぐために使用したものと考えられ、この竪穴住居に居住していた人が金属器を所有していたことを示しています。



↑ 貯蔵穴より出土した壺
頸部が欠損している



↑ 4本の主柱穴がみられる竪穴住居
↑ 主柱穴について

住居の屋根を支えた主柱がたてられていましたのです。竪穴住居によっては、主柱が2本のものや、主柱がなく支柱のみで建てられたものも存在しますが、一般的には4本柱のものが多いです。

↑ 出土した甕(左)と高壺(右)

主な遺構の時代

弥生時代の竪穴住居



古墳時代の竪穴住居



北山城の堀か?

